

為家集
上

~4
2187



利生
2.187

為家集上

春

歲旦立春

立春

立春日

春五日

正月廿一日

初春

初春

早春

去天

正月

踏歌節會

踏射

乃里中

回宴

子日

子日松

朝子日

霞

霞告

朝霞

山霞

遠山霞

海霞

海霞

海路約霞

江霞浦

浦霞浦松

河上霞

榴霞

寫

栽梅待寫

初寫



香中管

竹管

溝家竹管

山家管

鶯啼谷

若菜

雪中若菜

雨中若菜

野若菜

春管

春霜

冰始若

冰銷回地

梅

雪中梅

雪似梅

梅間雪

庭梅春久

簷梅

睡亭夕梅

梅風

行路梅

梅香坊路

南山梅蕊

柳

柳露

水邊柳

柳色雨中深

蕨

山底採蕨

地早蕨

春雨

夜春雨

朝春雨

晴雨

曉晴雨

曉天晴雨

湖晴雨

春月

春山月

浦春月

酒邊春月

里春月

江上春月

春曉月

春曉

春夜

春日

春風

春乃風

春野

江上春風

樞

花

獨酌花

栽花

深山尋花

尋見花

朝見花

朝花

晚花

盛花

山花

山花

花滿山

暮山花

山家花

龜山花

志賀花

出花

野外花

水上花

河上花

龍花

溪邊花

池邊花

花浮洞水

花下日暮

雨中花

庭花

庭上花

花雪

頭排花

林苑

花交松

花喜友

露接花

霸中苑

閑中苑

月交苑

寄月苑

寄辰苑

寄雲苑

寄露苑

寄雪苑

寄風苑

苑雪

苑中雪

苑中雪

落苑

若上落苑

水上落苑

落苑

苑落

苑如神

苑如神

苑如神

苑如神

苑杜

苑里

苑園

苑田

苑木

苑草

苑浦

苑獸

苑鐘

苑鳥

苑代

苑地

曲水宴

之日

葉菜

杜若

款冬

籬款冬

河款冬

藤

松間藤

舊藤

舊藤

舊藤

暮春月

江上暮春

老暮春

惜暮不返

三月盡

三月盡

潤月苑

潤三月

春

春歌

春

歳日立春

建長三年

雪はちりにきて侍をこれの物憂きことありて春のきたる

文永八年正月十九日 前九十九家月次十首

何れも乃の日の敷い冬あうかひてを春はくふ立にける

立春 貞永元年 日裏脚言尚座又首

春日なる之笠乃山を去りぬと先地よりに物日すすし

正嘉二年 唱阿法作物と熊地山心經字又首

まじらぬ春のたけに立春の雪乃よりある平履小そ志侍

文永六季七月廿八日下前中將らせ物取動と雲茂橋下社續百首目

意さる海らたらし此物取又立也なりと侍いしにたり

同七年七月廿二日庚申續百首三人詠之

己れら此に侍日教よそ目乃ゆめサ日高と志し侍

立書 同八年四月廿二日續百首

長宗より侍日教を恐れハ相毒あり立うむる甚き侍

去立日同六年正月廿八日續又十首 六帖歌

此竹の一枝いりにて心とて大なる命を委ぬあり侍

合侍いしち乃日 寛元二年 新撰六帖歌

あゝ海浦の甚なりと云と引之て此の物取けの如と云

初書 文永元年三月十日 續三十首上下各置一字

あゝ海浦の甚なりと云と引之て此の物取けの如と云

同二年四月六日 續又十首

予もあつるあそ此書乃日海人の君と云しんあめあそ

初書 廣 日元年十月廿一日 續亦一を置一字

あひめも山と云しんあめあそ此書乃日海人の君と云しんあめあそ

早春 廣 文永六季正月廿八日 續又十首

あそ乃あそしんあめあそ此書乃日海人の君と云しんあめあそ

同又年三月十三日 續又十首

立也なり又しんあめあそ此書乃日海人の君と云しんあめあそ

同八年正月廿九日 前大名家月次十々

のやじくも岩増くた妻もそと一立之儀もいふも

喜天 日元年十月十日 續又十々

と相又雷を此雷と引てのこけきやうもまたきり

正月 同八年正月廿八日 續又十々 六帖歌

逢あふくいたぬぬあふらうも一此雷は降もつても

踏奇節會 曆仁元年

あはれおの雪のやうにちおとくも月の雪も天はじや

賭射

あつきうあふられたる百あはれ大ま人と海をせりし

の里ゆみ 文永六年正月廿八日 續又十々 六帖歌

棒をたふれを井に引つ連くいとたいて乃心成を志

同宴 曆仁元

和のこもりの立海の花乃袖の文をひはる海分とれ

子日 文永七年七月廿二日 庚申 續百々三人揃く

子日あはれ乃お山此書とくそ久しき此代のまのひま

子日 同八年正月廿九日 前大名家月次十々

子日すけいはくいおと龜乃乃此若根の松や多のめを

朝子日 室治元年 入たお故大西園ち亭も

物あはれお山をその小松原福也とわたりしあはれ

震 唐仁元年 無福寺 檢別處 律令 經勅を十首

此の娘は花ふゆ山をまかれおけて妻の夜母すじ
文永元 有りにも海を此海へ魚をらん妻て山乃又もをり也

日平比月廿日粉河の勅を三十三首 依受告勅を三十一首 置二
字控上親者名馬三及

龜波浮入にゆえし一み成はくし妻の立にる成

妻告妻 日八年比月廿二日 續百首

山乃甥は妻の衣ありせしうと立ける妻をいふ一

朔震 日七年正月廿日 庚申 當座二首

妻震 秋まにまじしこのまをいふゆきまをいふゆ

山震 日二年七月七日 禅林寺 當座七百首 日八十首

山の甥は花ふゆ山をまかれおけて妻の夜母すじ

遠山震 建長六年正月

かひのひにそれをもえくは東海を妻のいふゆをいふゆ

却よりいへ魚をてし妻のまをいふ山乃おくとま

海震 承久二年 日妻 妻の日社之首 奇合

是は海乃まじし日及浦をて妻の波をいふ志るん

海路妻 嘉禄元年

和回系は海へと志るは妻の日社妻のまをいふ海の日社人

海路朝妻 元仁元年 右大将家

由良乃と朝朝舟の波をいふて妻の八重の塩風

江原浦 文永八年四月十八日續百首歌自新後浦原

昔日たゞしと浦浦たゞしと處々よとくともまもるる

浦原隔松 貞應二年

立海の處乃約とあせれとも油舟志く浦乃まもるる

河上處 貞永元年岳部成実歌合石清水社之首

河内りくいのを川をさしたはれ見おれ約もあむる

楊處 文永二年禪林寺殿七百

小舟此海の寄て善尚書乃思小海のと遠く一せのせ福

學 建長五年二月

尾、ちり地妻乃日氣を志くまぬの船のくは學乃一思

つりくとも人い置れ長作の妻の友とてまもるる

文永元年粉河寺之十三首

おとたのりき海れとも學乃ゆえつる妻乃此ゆりつ

載梅治學 元仁元年 古大名家

誰りまもるる一垣板乃板したまひせとくはぬ妻乃學

初學 文永八年三月十三日續五十

谷の戸も自由あられ書とせと書書あはれは學乃此

雪中學 日二年七月十五日續五十首

白智乃るる枝の梅を好とんて書とて書とて書とて書とて

日八年正月廿九日 於前九大臣家 月次十

草木のあはれぬ花さく雪のちりけの舞をみ守る
竹管 建長六年正月

よのちのあはれぬ花さく雪のちりけの舞をみ守る
隣家竹管 元仁元年 右大納家

任の難乃竹管の舞と勢ひひらけぬ管をみ守る
山家管 日年 右大納家

こころのあはれぬ花さく雪のちりけの舞をみ守る
山北管
管 瑞谷 承久之^二

春さぬとあはれぬ花さく雪のちりけの舞をみ守る
表菜 建長六年正月

里人や雪のあはれぬ花さく雪のちりけの舞をみ守る
雪中表菜

あはれぬ花さく雪のちりけの舞をみ守る
雪中表菜 文永八年正月 右百首

あはれぬ花さく雪のちりけの舞をみ守る
雪中表菜 日八年正月 右百首 表菜 月次十首

あはれぬ花さく雪のちりけの舞をみ守る
雪中表菜 建長六年二月

あはれぬ花さく雪のちりけの舞をみ守る
雪中表菜 二月

あはれぬ花さく雪のちりけの舞をみ守る
雪中表菜 二月

弘長元年院百首

まらさげの苑とてむ打海に遠る世の春は淡雪

春霜 建長八年二月

二月の初雪の夜もむまをわらわちこそいふも花を
ささるゝ又もいふは乃露は文もむまをいふはむらひ

氷始解 又永六年正月十七日 高座三三

こ物も又とむにせしはうは氷始解いふ乃池のやうに

氷銷田代 日八年正月十八日 筑前守 筑前守 筑前守

春風は深田乃少き世にせり河のほとけのさむらひ

梅 寛永元年 中洲入田 水尾 風奇 十一月

春の飛れ花の袂より人の袖は多き世にまら梅

梅の風乃使も白ひまらうの端もむむはわたの光

建長八年 眼もさふこそたふさる梅のさむらひのむらもさむ

弘長元年 梅のつ芽もむむは乃春風は昔のあめもいふはあめ

梅花はあめさうりさめいふはあめいふはあめいふは

又永元年 粉河寺 三十首

咲ぬとる白ひも春の梅もあめはいふはあめいふは

あめはあめあめいふは梅花はあめあめいふはあめ

同七年 七月廿二日 庚申 筑前百首 三人詠之

あめいふはあめいふはあめいふはあめいふはあめいふは

南の梅葉 元仁元年 右方お家

ちのけしう目けしうの雪まのる 雲れ梅えい

柳 貞意二

春の日は光もれしむろく柳て目けしう春柳のし

わさみとり柳のしをけしうあつた春の目教けし

うあひく柳のしをけしう入ていけしうをけしうの春風

しみとる柳のしをけしう系とてあきくおはる柳のし

柳 貞意 又永八年正月廿九日 前九大臣家月次十首

春の日は光もれしむろく柳て目けしう春柳のし

同八年正月廿二日 續百首

いづし柳のしをけしうのしをけしうのしをけしうのしをけしう

水色柳 寛永元年家月次

春乃の柳のしをけしうのしをけしうのしをけしうのしをけしう

柳 色雨中 深 又永八年十月廿日 續百首 松侯朝

しみとるしをけしうのしをけしうのしをけしうのしをけしう

蕨 日七年七月廿二日 庚申 續百首 三人詠

春乃の柳のしをけしうのしをけしうのしをけしうのしをけしう

山底探蕨 日八年四月十八日 續百首 松侯朝 詠

あつたしをけしうのしをけしうのしをけしうのしをけしう

野早蕨 日七年二月廿二日 續百首 松侯朝 詠

前年八月二日

ひとなる文のゆるりなればねをよこせし事なむいひ

喜雨 建長八年三月

月教のむかひも如まむ小倉山をこむかてぬて喜雨を
いづるも屋敷の落津のりて縁をいよ海を喜雨を
比くも雲うひぬれ喜のぬれ喜の接ぬぬいひ
咲花たりそりたるそく海を乃そくこふるう海いひ
世の喜乃めつこにも海を若れ種あふと泪のぬれ喜雨ん

秋喜雨 元仁元 右大将家

月教らより大なる白梅の屋敷な秋喜雨乃とるむつ

朝喜雨 建長元年四月尚日海く早一卒百首

あつた喜雨のかりあり海を喜雨にむつたのたにぬつ

帰原 宝治元年院百首初句十一月進入

秋風ゆささそあうりいかにひのあちきぬ海を届ぬ

月教乃りすめ海をた都りて教をえぬかひりぬ

いふしてより此花はよぬあさぬのむなり海をぬ

か魚白をさと記をいづるあひせんむよそあ白喜雨

喜雨をこれひさぬと見えし此喜のむ乃原の又海をん

山のいれたのるえ乃横をいし海とみし喜雨のりぬ

文永七年七月廿二日庚申院百首三人海く

りかゆ今か海をいししてあそ喜雨のゆのえ

此のふとえの中に見える春の月陽の春へあはれ

浦春月 寛永元年の三位家朝の一首

明るる浦乃を記名をよそひの月より魚しる春月あは

海色春月 文永二年二月廿二日 後鳥羽院の一首 二年局 節を三首

春の秋の浦乃を記名あてに記りもたてに記るる月

里春月 日年三月十三日 續又十首

月よもたわらむもあはれもんあはれ乃史料の里

たの春月 日二年 浮林と辰七百首

あはれもあはれもあはれもあはれもあはれもあはれも

春曉月 弘長元

鐘の音をしるあはれをこのあはれにして秋のりもあはれ

春曉 文永元年十月十六日 續又十首

あはれの夕付あはれあはれあはれあはれあはれあはれ

春夜 建長元年二月

秋をを明るる記名とあはれん老の物もあはれの物

春日 文永元年十月十日 續百首

之笠山之あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

同二年 産後六十首

あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

春風 日八年四月八日 續又十首 兼雅大僧都奉詔

いづのるむ谷は春風吹くやうもさるるあめのまらむ

春の風 日六年 四月日 後百首 六帖 終

佐とあるむ(山)風乃ありし山花乃さうりいさ然うらうきり

春野

り春乃さ急のまらむ桜むあうまそとたの海に

春日野むむしと妙も泣如くいれ葉も朽も誰がま

以上春望 建長二年九月 仙洞 治承五年

新波はやみあそりせし物うはまにまら春の権風

任の江れ波の海海をさうまに春あすみの命よん

櫻 寛治元年 十月 女押入 日押 屏風 終

春乃見れ光もはりあ山さうり花のゆりい風もさうん

た水くく桜あうまんの川とくくもりのとけそ我世のね

うしはうい風もいとや山櫻んぬあそんそまあうき

花 貞永元年 閏白家百首

後海推 ぬまうの山乃さう春の神も花咲ぬしはるまうそ

たつあめれぬ乃櫻れ紀ううそさうけてしりまをせ

唐仁元年 貞福寺 檀別 苗法 市 宗 經 勅 色 十 首

三毛體ハおれ一昔れ山あうりきまひむれあうかるとん

あうそとよそよんさうりうまあう海の山花咲ぬし

と死乃るもえあめれん櫻花移あうそあれぬれ

獨倚紀 室治元年

誰かもまゝに死にまゝに生かすはなほなほの世に生かすはなほの世に

裁死 文永二年 祿林寺殿七百首

ふとせいのしとあやむる世もあやむるもまゝに死にまゝに生かすはなほの世に

深山存死 日永年二月廿二日 後多相院山忌日二乗為勅を三首

世のうらも危しとやするはなほの世に生かすはなほの世に

存見死 嘉禄二年

あやむるはなほの世に生かすはなほの世に

朝見死 文永八年二月廿二日 後多相院山忌日二乗為勅を三首

あやむるはなほの世に生かすはなほの世に

朝死 仁治二年 祿林寺殿七百首

あやむるはなほの世に生かすはなほの世に

文永二年 祿林寺殿七百首

あやむるはなほの世に生かすはなほの世に

文永二年 祿林寺殿七百首

あやむるはなほの世に生かすはなほの世に

あやむるはなほの世に生かすはなほの世に

あやむるはなほの世に生かすはなほの世に

建長六年二月初七日 前右大臣西園寺公兼見世二首

あやむるはなほの世に生かすはなほの世に

盛苑 文永二年

あまのこころのちかきもあつたむねのふかしの

山苑 貞永元年 日裏 菊産

山より吹く風はのちかき風との花をよそと見て

ぬ文永元りやあれ花の盛にえそ志しぬ梅よまほしき

日八年二月日思心仲業 勃色之首 鍾科紙抄わい

よやまの吉野の山とそつねすといふらさし花をよそ

山海苑 嘉禄元年

夏は花のこえ乃山井とつらとつらぬむねの

寛永二年 右大将家云

かきこ立山を夜さう又いそげうむねむ乃下風

正嘉二年三イ 六十首

あまのこころのちかきもあつたむねのふかしの

花満山 嘉禄元年三イ 拾大細之部三十首

あまのこころのちかきもあつたむねのふかしの

書山苑 貞永元年 右大将家社三首 哥合

また志すむねのちかきもあつたむねのふかしの

山家苑 文永二

山梅花乃あつたむねのちかきもあつたむねのふかしの

龜山苑 同八年四月又日談五十首

龜のおもね乃さくう新代の喜舞うしと苑送曲り

志候苑

志り乃山梅の雪とぬりしもの乃はたれぬのふら

雪苑 日二年 禅林寺及七百首

旅人のゆきの名あしとてむらもあはれぬ

野外苑 嘉禄元年 覚寛法眼云之首因

雲風は野鳥乃鏡んくぬもとの事とうはる苑はあつ

水と苑 又永二年 禅林寺及七百首

嘉あつく梅の目牧も山あは苑のうんらとるはと志候

川上苑 嘉禄元年 覚寛法眼云之首

ゆとり川あゆむたはあきせなは梅の目あはる

遊苑 又永二年 禅林寺及七百首

石と梅とを川雲のうらむらてとら乃教あはる

遊遊苑 安貞元年前太政大臣家新造

石と海遊ほいとの乃梅むわられぬあに枝あひさり

池邊苑

みよれおつる遊ほあぬのむれ色や卯はそらぬやと池あ

花浮洞水 寛元元年 日吉三社寺合

鶯を舟谷は梅乃またうらえゆきと彼よのおとびとら

死下日書

美死乃未下教れ夕此くひ獨りやとももせよと書ぬ日

建長之年おち改大内西園寺之旨

かしとておとつてこれぬ夕日教死もう川くふを海乃あはれ

田中死貞永元年日吉社大宮社之旨法宗

喜海代の志海夜明也とと死乃志此く此神也志りし

庭死又永元年二月廿二日坂多御院中島日尚座之旨

加治乃死乃あつて幾々のつゆをたむし一の書さくふん

庭上死嘉永元年

此乃に又庭乃あつて書みつてせしめまへん此死とつた見

死又く又永八年四月十八日坂百首死自和廣御後由治也

此乃てゆもあつてしつらつちのあつたもつと書れぬ

臥拵死日二年保林寺及七百首

きあも又大々の梅木のさけき書おあつてと書

林死

嗚あつてやせぬもあつてしつらつちのあつたもつと書れぬ

死文松

この死れ松乃あつてぬあつてと書らつてあつたもつと書

死喜友日七年二月廿二日坂多御院中島日尚座之旨法宗

喜をへく死せしつてあつたもつと書らつてあつたもつと書

蜀梅紀 建長七年三月大非宮文首

立り人よりや梅衣子法いなりしをりしを

蜀中紀 又永八年二月廿二日坂巻院中旨二重房勅記

ちりき乃梅庵つる山せとくおちりしに紀をゆきし

田中記 嘉祿元年元寛法服舎文首四

ゆいふまれを梅のつとちりしにありしと数むれは

月おむ 弘長元年

梅もたれ一本の蜀梅紀の月よそをいし

奇月紀 又永八年三月廿九日花丸大名家月次文首

又た志して梅あまし梅冬をいし月日梅もたれは

奇花紀

来り見よしとふそ梅のつらむいりる山を

奇花紀

と紀の本にけしぬをてさうし梅のつらむいりる

奇露

山よりつらむ見たりし梅のつらむいりる山を

奇雪紀

そふもつらむいりし梅のつらむいりる山を

奇風紀

山崎のつらむいりる山をいりし梅のつらむいりる

延長二年二月

河花世のうきにもまされて山里花のさうりぞえてあつる

花下忘帰 文永八年四月十八日漢首發 和漢朗詠 田記

ふゆさうとつちかへんわくぬるいふ代も屋のさむむれ本の年

元永元年 日二年三月十七日月次三首

雲母花と海ひいし山さうりむむれおとそみり 秘のさる

延長元年

山梅さうりふ雪とあつと花あつるいよりのまん

ゆりもろむり泣れさあ智恵のさうりさきさうり

文永元年 粉河ちり三十三首

心入る世に咲くかろくはあつとぬしつり見せむもあつる

昔上落花 日二年 涼林ち辰七百首

春の心と花れあひつりしてははあつる上の花れさき

水と落花 延長元年

河原のこたえのむすすかろくの中いりる 山井乃水

あつる狼藉 文永元年 四月十日漢首發 和漢朗詠 田記

吹まふ風りまもれいあつるむすすかろくちり梅成

花落道風

まろくさうり風り吹くははあつるむすすかろく

花飛如雪

喜んせしとあるらうく 楊むちれい 錦さし心と花

残花 日二年 福林と後七百首

人志強ぬみ山さうく 不れちる故とて 花のるを思ん

既残花 寛元元年 普喜法師の蓮生 西山 禅室 海く

山ありき 谷吹の 竹の 舟の 舟より 舟を 舟と 舟と 舟と 舟と

舟の 舟より 舟を 舟と 舟と 舟と 舟と 舟と 舟と

舟の 舟より 舟を 舟と 舟と 舟と 舟と 舟と 舟と

喜雲 又永元

も山花より 舟の 舟と 舟と 舟と 舟と 舟と 舟と

喜東

鳴ぬまそ 舟の 舟と 舟と 舟と 舟と 舟と 舟と

喜里

小倉山の 舟の 舟と 舟と 舟と 舟と 舟と 舟と

喜景

喜んせしとあるらうく 舟の 舟と 舟と 舟と 舟と 舟と

喜田

舟の 舟と 舟と 舟と 舟と 舟と 舟と 舟と 舟と

喜木

舟の 舟と 舟と 舟と 舟と 舟と 舟と 舟と 舟と

喜草 貞應元

さのつゝ死ね得見し命に泣きさうむ教庭は春草

春浦 文永元

春の日のあつめや世海一松の松子代を海にへし位吉城

春獸 日二

春の種やたつちる春にのひぬさうしう志らうり初雲のあか

春鐘 日八年四月廿八日庚子十首 兼雅大僧祐 春臨

初浪山春の心誠はさぬきもれはゆるるゆりひひきた

春鳥 日元年

春の鳥のあつことと花もこきぬぬ海をたもさる増るん
とやう山鳥ととさるぬ谷にけり方をさるるとさるる

苗代 文永七年七月廿二日 庚申 庚百首三人 海

春の里れ志つらかりりいそらしとせき入るあえり浦の坊

夕桃 承久二年三月三日 日裏二首 師云

のをよりいふすはのし山桃のその花桃の春れ夕風

春の宴 文永六年正月廿八日 庚子十首 六帖 歌

春く春の宴るるはあ乃盤もあつしうまを桃のそ

三日

桃の起解乃色もやあぬらんやとく小初あえり月せけ

葛葉菜 日七年七月廿二日 庚申 庚百首三人 海

葛又社ととえのんり夜すみきつむ世れ紀りゆりり

暮春日元年粉河ち三十三首

関まてしむほりもあはわさるる屋よひ乃日教ありき

著書書後 承久二年

いほより書わたり幾ん夕あきまはひくべしんしん

著書書後 文永六年四月廿八日月次三首

文永又さり書も後まみり花よや志りしきあかひん

暮春日月日二

あまれやよひの末れおまみよりたつふえあはれあはれ

以上著書書 嘉禄元年控大納言家三十三首

雅波り入江りあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

老暮春 建永六年三月

老の身れあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

惜書不備 文永二年 祿林寺版七百首

山川のむれ志ろみりあはれあはれあはれあはれあはれ

三月書 貞應元年

今父文やこもんり書は解よひの元れあはれあはれあはれ

今ひとるあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

身のをあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

文永七年七月廿二日 庚申 録百首三人海

今あつに別める事たがらまてふりてこそ起しうせむ

三月書物文永六年三月十三日讀み十首

七月のりかる事たがらまてふりてこそ起しうせむ

潤月紀 安貞元年 成茂宿禰又首

山栴死ハ二月の夜も夢とてあぬあひは栴りえてつ

潤三月紀 日年 多岐津宮六十首

河井地を故る屋のひの庭栴とてなれぬ事たがら

事貞意之

ふと又た志り夜事さつとたらあまきしし音あつ

われは正敵交ふと白妙も飛火の壁ハあつ音

面氣ハもるも音に立立しとてあつ栴も音

山栴屋をぬるあつた志りあつ栴あつと

せらつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

事たがらまてふりてこそ起しうせむ

あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

寛元三年十月八日前在夫并光俊船中 百首

事たがらまてふりてこそ起しうせむ

建長三年 個月吹回御幸々次十首

事たがらまてふりてこそ起しうせむ

正嘉元年 七月詠々 卒尔 百首

高祿元年八道前右大臣任吉社二首

をとりあひりかきしにせむ言はれしや梅福ひもせり

私書字本題字と秋集く記く

おのそろひし房をふれ枕死すは紙あひと今そりまき
あやあやを井の橋をよとそやあしにけるあひれ袖
ふあひの袖ふしは風さるるに月あひのまのめり

為家集上

夏部

首夏 新樹 緑樹陰前 郊死

溪郊死 西後郊死 兼郊死 回家郊死

葵 郭云 傳聞郭云 岡時鳥

山郭云 邑郭云 海邊郭云 夕河鳥

寝覚郭云 年々時鳥 里郭云 古寺時鳥

渡郭云 野河鳥 岡月郭云 郭云待又月

又月時鳥 名不郭云 郭云徐稀 又月又日

武徳殿小育 ひとと日 箏 薦

高蒲

草高蒲池高蒲

樓

高樓

高樓子似早苗

朝早苗

山田早苗

夏田

五月雨

山五月雨

山里五月雨

溪五月雨

湖五月雨

川五月雨

夕又月夜

張五月夜

又月夜久

夏天

夏海

夏樓

夏池

夏社

夏鳥

夏風

夏雨

曉夏

夏胡

夏夕

夏乃野

夏蒼

夏雲

夏月

何適夏月

夏月似秋

螢

江螢

蟬

明佳夏

夏草

水邊夏草 去過夏園

扇

蓮

潭荷葉勁 水室

夕立

納涼

對泉避暑 心靜即身涼

早涼

晚夏

六月夜

六月夜

荒和夜

杜夏夜

夕之杜之

夏

夏歌

夏

首裝 建長八年四月

死せんとすは思ひおこせしことよわきのふを喜ぶをたつ

新樹

交うれて月さうやうと家君れ物端乃木陰うりきり

緑樹法お 又永年四月十日後百首歌自和漢初詠句

みうしやちもの坂乃交もまき家おれ山そおひあつす

卯死 建長八年五月

卯死の色や山となるをぬらんある月乃 氣をすまぬ

神皇の山子親つししにまじやうはれは神のまをぬる

曆元元年 皇福寺 権利あは法中 皇福勅を十首

はとまはたの心神音もつとそと 龍火の権きとやまは

寛元元年 皇福寺 十首

留はしむまされ ことそ子親まはぬるはく 九月の夜

交交まそとまひり 節らまの 節らまの 節らまの 節らまの

はとまはたの心神音もつとそと 龍火の権きとやまは

はとまはたの心神音もつとそと 龍火の権きとやまは

はとまはたの心神音もつとそと 龍火の権きとやまは

はとまはたの心神音もつとそと 龍火の権きとやまは

はとまはたの心神音もつとそと 龍火の権きとやまは

はとまはたの心神音もつとそと 龍火の権きとやまは

はとまはたの心神音もつとそと 龍火の権きとやまは

はとまはたの心神音もつとそと 龍火の権きとやまは

はとまはたの心神音もつとそと 龍火の権きとやまは

文永元年 粉河寺 二十首

ひんまはたの心神音もつとそと 龍火の権きとやまは

ひんまはたの心神音もつとそと 龍火の権きとやまは

文永二年 四月十九日 月次 十首

るねとや木の丸はれ 節らまの 節らまの 節らまの 節らまの

日七の七月廿二日庚申 漢百首三人詠

此の歌にさうおもしろいもの時多しとていふは昔のよき歌なり

傳聞部の日六年四月十三日月次三首

時多しとていふは昔のよき歌なりとていふは昔のよき歌なり

岡部の日 元仁元年

わたりは恒流の國海のほとけとて言ふは誰に傳へん
とていふは昔のよき歌なりとていふは昔のよき歌なり

山部の日 元仁八年に月日詠又十首 寂直始入奉

とていふは昔のよき歌なりとていふは昔のよき歌なり

岡部の日

子規書しよとていふは昔のよき歌なりとていふは昔のよき歌なり

物道部の日 嘉禄元年 中右大臣家書

今父はもつたれぬ時多しとていふは昔のよき歌なり

夕部の日 仁和寺二の十首

とていふは昔のよき歌なりとていふは昔のよき歌なり

又永八の日に相本二日漢百首

あきらみしやとていふは昔のよき歌なりとていふは昔のよき歌なり

寂光部の日 西暦二年

部の日 一とていふは昔のよき歌なりとていふは昔のよき歌なり

又永六年 正月廿八日又十首

山田子苗 文永八年四月廿二日 後百首

みよおの部をなすぬまの(山田)とちか(山田)の(山田)

復回 目元

尾山川藤乃小田よせをいけていり里まての(山田)とちか

文永六年四月十日 後百首と姓記

友のぬうの(山田)の(山田)代も(山田)の(山田)とちか

又月ぬ 貞永元

とらけたぬらひるも(山田)の(山田)浦の(山田)の(山田)とちか

あまの(山田)の(山田)の(山田)の(山田)の(山田)の(山田)とちか

康元二年 越野 山田首

さくら(山田)の(山田)の(山田)の(山田)の(山田)の(山田)とちか

さくら(山田)の(山田)の(山田)の(山田)の(山田)の(山田)とちか

大井川(山田)の(山田)の(山田)の(山田)の(山田)の(山田)とちか

又月ぬ乃(山田)の(山田)の(山田)の(山田)の(山田)の(山田)とちか

文永二年六月廿八日 月元二首

つ(山田)の(山田)の(山田)の(山田)の(山田)の(山田)とちか

又月ぬ 弘長元年

さくら(山田)の(山田)の(山田)の(山田)の(山田)の(山田)とちか

文永六年又月廿七日 月元二首

ひう(山田)の(山田)の(山田)の(山田)の(山田)の(山田)とちか

山里六月旬 建長五年五月

六月旬 常陸小山 藤山あよな残すしといふ白福ありん

陰又月旬 宝治五年

あもあもあ谷の垣ま根をききしとてしるれりる月旬

湖六月旬 又承二年 福林寺女七百首

鏡山ひきまらえむとらん波母をとあつていふ月旬

川六月旬 日元年

あつていふ月旬のちむらじりるまゝいふとていふ月旬

夕六月旬 日七年 六月廿二日 後鳥羽院 中納言 藤原 隆 二首

六月旬 日元年 日七年 二月十三日 續百首

又六月旬 日元年 日七年 二月十三日 續百首

あつていふ月旬のちむらじりるまゝいふとていふ月旬

又六月旬 日元年 日七年 二月十三日 續百首

あつていふ月旬のちむらじりるまゝいふとていふ月旬

夏天 日元年

このたよをきくあつていふ月旬のちむらじりるまゝいふとていふ月旬

日八年 日十月 日續五十首 寂菴始入来

くれいゆきあつていふ月旬のちむらじりるまゝいふとていふ月旬

夏海 日元年

あつていふ月旬のちむらじりるまゝいふとていふ月旬

夏糖

常きくあつたふゆのひやを糖よむる者乃故也

夏他

郭の宿乃他も宿まれ名のうたしと申すや秋のことか

夏社

あかき社乃このまこと忘れぬ^{けい}なりをてあひしをま

夏鳥 日記

任あつとられ乃郭のあひもてやまのあひのらん

夏鳥 日記 八年四月日 宿の十首 寂ぬ始入来

鳥山宿多むねもあまうすき 秋の鳥をまきしこと

夏雨

昔々小社しそぬれあつ乃道橋たはくはつら

夏夜 詠長元

みか月の末種はまける 秋の宿乃宿を如く涼しき

夏朝

短冊れまのねまのうらされぬあしはましそ涼しき

夏夕

とくあつ光のついでにわらふとほのまの宿乃平れ死

夏乃 日記 六年四月日 宿の百首 六帖 詠

とくあつ光のついでにわらふとほのまの宿乃平れ死

みそ起川あさ乃もえたゆりもあまのいひの向て友のあ

荒和後 文永元年 粉川古二十一首

月と日もひもあふぬあまのいひの向て友のあ

杜夏後 日五年 三月十三日 續六十一首

とらふと秋と約とそはのあまのいひの向て友のあ

あまのいひの向て友のあ

あまのいひの向て友のあ

夏 寛永元年

部とまるといなり乃みりり後あまのいひの向て友のあ

とらふと秋と約とそはのあまのいひの向て友のあ

寛永二年

鳴あふん里とあまのいひの向て友のあ

流りあまのいひの向て友のあ

流りあまのいひの向て友のあ

正嘉元年 卒亦百首

言あふん里とあまのいひの向て友のあ

後乃花とあまのいひの向て友のあ

あまのいひの向て友のあ

あまのいひの向て友のあ

あまのいひの向て友のあ

多兒亦何用... 秋部

為家集上

秋部

立秋	初秋	初秋風	初梅落
初秋月	早秋	中子秋	桂經子秋
新秋月	早涼至	涼風入空廬	七夕
二星期秋	七夕後期	七夕期	天河
秋	秋	庭秋	朝露
秋露	月未露	女高花	曉亭女高花
露	秋露	露	時露
槿花一日	草花	野菊花	曉外菊花

圓月	見月	初昇月	秋秋待月	秋雲	秋星	秋谷	秋社	秋回	小笠原	閑辰秋風	振宿席	溪席	舊虫	秋虫	露	秋子	此經系花
圓屋月	觀月	停午月	未出月	秋曉	秋蟄	秋遊	秋衣	秋雨	了木の	秋風拂書	小鷹狩	麓席	松虫	夕虫	庭系扇	葛	草花露
氷上月	十五夜月	曉月	山月	月	秋浦	秋夕雲	秋舟	秋木	秋夕	海道秋風	の日記	名席	席	秋虫	竹扇	淡菊	蒼草花
池上月	八月十六日	漸頷月	出山月	秋月	秋楳	秋の蹄	秋嵐	秋熱	秋鳥	鴨	秋風	野席	深山席	蒼	虫	此更欲花	月あ草花

河月	湖月	湖上月	海月
海邊明月	船中月	水鄉月	田月
田家月	松月	山家月	田家月
獨對月	月前風	月前煙	月前霧
月前席	月前馬	月前霜	月前松
月前秋	月前松	月前竹	月前鶴
月前馬	月前屯	月前眺	月前懷舊
月前香	月前旅	月前霧	霧旅明月
霧中月	霧中秋月	振月	衣下月
寒月老	苦月愛	圓九月十二夜	柳月河行
欲入月	月吟風秋	惜月	鳥
老屋未末	初馬	雲間初馬	曉馬
邊馬	霧	山鈴膏	川旁
園旁	山中秋興	田家秋寒	里秋
擣衣	新擣衣	同擣衣	擣衣端
海邊擣衣	浦擣衣	擣衣幽	月下擣衣
菊	庭菊	菊花秋久	菊霜
紅葉	初紅葉	山紅葉	紅葉添多
雨中紅葉	雨後紅葉	松間紅葉	朝紅葉
河邊紅葉	池邊紅葉	涼風抄秋樹	雜秋

長月

秋乃て

書秋

山家書秋

書秋月

書秋おま

九月書

田九月書

秋

秋歌

為家集上

秋

立秋

建長又年七月

秋不るの月秋公志るにのぬぬの暁さむ之秋持子にせる

文永六年七月廿八日お申將公世部白勅記

みとれせしこし川の清きせに言さるる秋乃初月

同七年七月廿二日庚申讀百首三人傳之

いほれせし小倉の山に松陰も秋乃初月小倉をきこむ

初秋日元年松粉川古詠三十三首

なほとせし秋乃初月

初秋月 日又年三月十三日續又十首

初秋月 日又年三月十三日續又十首

初秋月 日又年三月十三日續又十首

初秋月 日又年三月十三日續又十首

初秋月 日又年三月十三日續又十首

初秋月 日又年三月十三日續又十首

早秋

早秋 日又年三月十三日續又十首

早秋 日又年三月十三日續又十首

早秋 日又年三月十三日續又十首

早秋 日又年三月十三日續又十首

早秋 日又年三月十三日續又十首

早秋 日又年三月十三日續又十首

早秋 日又年三月十三日續又十首

早秋 日又年三月十三日續又十首

早秋 日又年三月十三日續又十首

早秋 日又年三月十三日續又十首

早秋 日又年三月十三日續又十首

早秋 日又年三月十三日續又十首

早秋 日又年三月十三日續又十首

早涼至日二年 祿林寺殿七百首

此津のまに秋いさめらんうきくぬの家衣ひに風そまに志む

涼風入心簾 貞永元年 内表為座

きよよりいさめ海とさる秋風も方に志むらんちやに志む

七夕 安貞元

あふれ川こそあやせやかるらん 待書おけりやー念風そ

彦星^{彦星}た書待とそや天川方にしむるあなぬ日とれ

文永七年七月廿二日 庚申 淡百首 三人詠

人おれ七夕はあれいぬにふ秋とそ待とるらん

二星期秋 寛元元年 日吉社詠合

秋残あつとそ待とらん天川城合よそ待とらん

七夕後期 弘長元年 院百首

あふれ天の川に秋風もきれとそ乃神之白く

七夕期 文永六年 正月廿八日 淡百首 六詠

七夕はあつとそ乃あつひそと中とつらん天乃川あつ

天河 建長元年 七月

あふれ天河あつとそ乃あつひそと中とつらん天乃川あつ

萩 弘長元年 院百首

いさめあつとそ乃あつひそと中とつらん天乃川あつ

文永元年 於粉川寺 二十一首

ふもかゝるものよりもむきよぬにさほは乃日教ハ

秋唐日七年田九月十之唐後又十首を春

とてこそまほしくかひぬむき唐又あり月のまゝのつる

長唐 長元

こ備しーか収てり物言れむ唐長乃屋ここ人まのあ

唐唐文永二年四月又日後又十首

花唐秋のさうたなういふ子乃あゆむ唐あとうれむ

横死一日日八年四月八日後百首新自む唐朝海

とあつとむたむあむにわつて候自々ん物うなれむ

系死 日年月日之首な日漢

月におもぬ秋のさうたむもまひゆむよむすのあたり唐

唐系死日七年八月十八日初九十日十首月次あ

任りあるあむたうもあへととく秋のけ花さうん

唐外系死 志源元年 初九日

今より唐風さむし下繫まとうのらひら唐秋唐む

唐徑系死 貞永元 口裏 南産

ぬきぬきとゆきてやゆらんり夜すそむあ乃唐む唐

唐紀系死 文永元

又てと死ん今之はしゆくたのいとにむあく秋唐乃む

日八年又二百後百首

とけいらく久らるし秋の枝は葉乃お枝の花は志く落
書草花の志二

それのちるふら夕暮し花落葉乃秋の人ものらん
月お草花 文永元

君ゆはこころよふる月お花のこころも花すまは
秋葉 建長又年九月

いゆより秋葉や花をたぬぬらん花は葉乃花の
昔日又年六月

とらくに身を恨ともま書草花を中まことのうらまはる
秋葉 日又九

日茂魚つわさせ秋葉の海草生れ小枝の葉葉と色かた
秋葉 文永七年閏九月書日元九十月家月次十そ

秋風乃あらしりしに中の花は秋葉今そく花は
秋 建長又年七月

何ゆの秋は葉りて花の意ですらよ花乃花は花
かといと秋は花にすらにわく花は花と花をるさる

弘長元年院百首
よかこれ後し如く昔秋をく花乃花も花は

文永六年四月日 後百首六歌
昔は花乃花を今そくに花は花も花は花

庭草齋 貞永元年の表為座

為やぬ藤花とる竹由にむ志く庭をえする志く此の

竹齋 建長八年十月

時由世所教のる此種を志くしけの葉末にう竹乃下家

忠 日乙酉九月

系乃唐抄の末部ふれ齋 齋より〜如く〜忠其教ふ

秋忠 文永元

是道りやぬ人つ〜き夕のぬうきハ此の松む〜の齋

夕忠 日八年四月乙酉後百首

海やあ〜い〜と已能る夕は〜ひすすやあ〜り書忠入齋

秋忠 日七年八月十日 希元上長家十首 月次 初夜

あ〜と此とま〜る海と〜さ〜り〜海と〜る床に〜るん

葦 建長五年八月

ぬる〜うち〜に夢と〜さ〜る葦と〜る松のあ〜い〜

海の〜次種を志くし〜い〜り〜海と〜る松のあ〜い〜

藤 忠

此の〜や〜い〜海と〜る藤と〜る花藤ま〜ぬ〜此の松むの齋

松 忠 日乙酉

〜り〜い〜松りや〜る松のあ〜い〜松むの齋

藤 康元元年 熊野山二十首

文永元年のりぬとやこ藤原朝とてあに麻村鳴らん

弘長元年 院百首

とらふ山映かたひと唱麻とらふもかぬあここむそさく

文永元年 秋粉河寺三十三首

あとも木も文法く秋もさく麻ひともや書けり世にゆらん

日六年 日月日 院百首 六歌

位かれくかたきおと小倉山も海ととに唱麻村とてくれ

深山庵 日七年 八月十八日 龍虎大良家十首 日次 初歌

奥山も木葉もかたさくみらりりみらまふぬてそあつる

溪庵 日年 福林寺殿七首

谷わくくかひ今もあく麻かひーやれぬ書やこらん

麓庵

小倉山もさく麻村勢斗けいせさくぬ光も音とあれせる

岳庵 貞永元年 日表南庵

あまきこ今う地々んさきかの書く小倉乃秋とさてくれ

院庵 文永二年 九月十三日 仙洞御歌合

老てせしやふれりるるよしく秋もれぬ小男麻村勢

旅宿庵 福林寺殿七首

と音も麻乃音さくぬ者あく麻よかよふ善やんぬ

小倉野 日六年 日月廿七日 院又十首 六歌

あまやさう秋のささきをわらわると 釣立志するはやふゆ

の日記 日六年

わー山びく山の秋のささきを 麓乃里いすみかひぬる

秋風 建長五年七月

吹風乃牙にむ文のわらわんでうつるさうに秋のえは

秋のゆるゆのきまけらるるさうにうたうたなるむく雲

又うたをさうさうの秋のゆるゆるのさうにうたうたなる

小倉 文永七回九月十三日 兼 建長十首 大素

才ののー秋のやさをそひぬんぬの山のあ乃をさけさ

同八年四月廿八日 建長十首 兼 建長十首 兼 建長十首

ひしよりささきをささきを秋のゆるゆるのさうにうたうたなる

関原秋風 日七年八月十日 兼 建長十首 兼 建長十首

今ふぬさをそひぬんぬのさうにうたうたなる

秋風 拂松 日八年四月十日 兼 建長十首 兼 建長十首

あてそひぬるのさうにうたうたなる

河邊秋風 貞永元年 日 兼 建長十首

伴鉄砲やむ藤のさうにうたうたなる

鳴 建長五年十二月

霜のさうにうたうたなる

いかゆがせしるる 文永六年四月日 兼 建長十首

志し春のよき乃相よきとて暮れ夜や秋の朽ぬん

秋舟

山本乃秋の時毎にこゑしあつるお葉にむせむやぬ

秋草

とくしとくせいの松風いふおんいふ秋そと

秋谷

いたせん春の時毎もこけ夜秋の風ある谷にけり

秋蹴

秋風ゆふと地ぬもおんをたしりこむとまる蹴の白糸

秋夕雲 日二年 福林寺殿七百首

此くくくふくくくくくくくくくくくくくくくくくく

秋野 日年 日 後百首 古歌

なてとく秋のさうせりあをれ我神ひらり朽とぬん

秋星 日七 年 閏九月 十三 秋 後 廿 首 古歌

あめ乃月とくくくくくくくくくくくくくくくくく

秋煙

あめくく秋のむけれ烟よと来す鳥のあや揺るん

秋浦

いづよりいほもあけ秋の月くくくくくくくくく

秋栢 日元

まらぬよりの雪あらしし秋ふけてきつねを思ふさあ母徳

同七年一因九月十三巻後五十首ち巻心

ふあふ杉を切けて入吉平にをぬかたうとさるる秋風

秋景

糸そとく是乃屋こけいひやあかりさるる秋景は物成り

秋林の中

ひー見し秋をそまぬさるる雲乃とわき金月乃り

秋庭

見し秋のをれとくふたありてふゆりふえやみかん

秋墟

宿かひにきふとふゆりふゆりあはれ秋風を思

秋雲 日八年四月廿八日續五十首 宗雅大信都より臨

あふへん人やえるとまの孫や雲のをこて秋の夕暮

秋曉

あつ月のあつ月とさるるを思ふあつ月の袖やゆきかえ

月 元仁元年 宗大信都十首

いふにせん月うとせ乃知とふあふあふを思ふ秋乃山

七加祿二年 宗任吉社詠三十首内

風吹く志つえの波も新えく月さるこゆるすみけし秋

波のこい月乃もさふ里まてきさるる浦は秋の墟を思

杖のよれ月も見えたるを来れをより月ならぬと云

杖取待月 日永に月十日後百首筑自和彦初秋の夜

杖月夜多きく文百首を成りしより月をよめる

未出月 日二八月十六日 仙田五首初念

白あまひよりて白あまひより月をよめる乃のえれ雲

山月 宝珠元

あすの月神祇の山は木のるよりひよりまるといふ

文永五年 三月十三日 後五十首

神祇山むし月あまひより月をよめる乃のえれ雲

お山月 建長二年八月十八日 仙田二首

未定さきをもよめる山のえれ雲乃のえれ雲のよれ雲

初昇月 文永二

いつたり月もそきるを二首山ひより月をよめる

停午月

もこのなるをよめるを杖のえれ雲乃のえれ雲

曉月 建長五年七月

山の端乃曉月をよめる乃のえれ雲乃のえれ雲

長月文永二の西明乃月夜をよめる乃のえれ雲乃のえれ雲

日八年 四月廿二日 後百首

いつたり月もそきるを二首山ひより月をよめる

新頃月 日二

あをのりそとら 立ちぬくえは けりもやる月

見月 日八年 日廿二 百淡百首

手をとく ぬきひとら けりもやる月

既月 正嘉二年 九月十三日 歌名 浦添 十首

明石 ^{ほろ}こむ けりもやる月 神姫 けり

歌よ けりもやる月 けりもやる月

十五 既月 貞應二

如きこく なるけりもやる月

八月十八日 文永元年八月十五日 後成一首 以て 一文字

長句と なるけりもやる月

いさよひ 寛元二

秋風よ なるけりもやる月

そらも 既

あぬよ なるけりもやる月

社 既月 文永元

あふよ なるけりもやる月

社 月 日七 日八月十八日 前 大 十首 月 既 既

朽ぬ なるけりもやる月

既月 寛元二

あふ坂や高きるぬの園の序月ぬとえらするの月歌

園屋月 文永二年 禅林と殿七百首

あまのせせり不彼の園をれ秋月をたのむるをたのむる月歌

水上月 建長二年八月十文書 仙田二首

月影とる石居秋夜むもあてに秋乃あつらひかきてさる

池上月 日之子九月十三歌 仙田秋信十首歌合

池あけむとひらやうらん花うらよすの秋の月歌

河月 貞應二

初秋川を流つれを秋の色に志しぬ花よりる月歌

建長五九 いもつとや月のうらにあまらんをさしはるるよやう川舟

文永二年九月十三歌 仙田秋信

うきありの詩とそ八代や常井川あをせすくさ月と

日七年八月十八日前 元正殿十首 月歌初年

あのかの月とそも夢あふ秋とくしぬれ園の春川

湖月 宝永元

あきさる海みさを分すよわてるや月のあけ秋なる波

湖上月 嘉禄二

月ふけとあそ海浦乃秋をれ志がやうあ海燈いよか

建長六年 良守法帝 尚座十首

くまの山あけ風ををぬいふる鏡乃山のをれ月

きねり又かひわらんちとちまに〜あしりやまの月

拙對月 安貞元

秋の暮れはとありけい涼とそよ風の吹くそら乃麻

月お風 久永元

たまたまの松の月よせいせいと昔のたけのこは月

月お輝

そとをたのめ葉のなげ輝り〜と日よかすの影つらむとま

月お露

秋の朝にほのろきゆれきうきも月のおもやあつたひん

正七廿二 露のりそ洞たぬきり毒衣ことせの秋は月とちり〜は

女三末三 まり死より秋を〜春といふも〜はよもきも通〜は

日年九月十三日 長流二十一首

廿二とむく毒の秋乃毒のいひ〜は〜は〜は

月お麻

新ちりたを〜は乃月教もあつたひん〜は〜は

見よたひ〜は〜は乃月をい〜は〜は麻替とあはる

月お馬

あ〜馬のあ〜は〜は乃毒あや月よ〜は乃毒あ

月おお

月よあよ〜は〜は乃秋の霜きり〜は〜は〜は

見よよ月... かくねとせは国をわたりて

月夜無事

よるちあつた月よえよわそよよのちをか

月お旅 天福元年 仙田南庄

先づりあきぬを井た友とていあるち 秋の月

月お霧旅 又永元

きくなむいふと志に旅衣山後の月お松歩をた

霧旅月

屋とて松や山は秋の月ひふあつた中山

霧中月 宝治元年八月十一日 他田五首

あつた月ひふと志に旅衣山後の月お松歩をた

正治二年 又十首

友と見てあつた月ひふあつた中山

霧中月 又永八日 月又日 又十首

秋の月ひふと志に旅衣山後の月お松歩をた

わたりあつた月ひふと志に旅衣山後の月お松歩をた

接月 建長二年九月

接月の月ひふと志に旅衣山後の月お松歩をた

名は月 三首 貞永元年八月十一日 又 関白家會

ついで川井代りてみあつた月ひふと志に旅衣山後の月

かりせ侍姑乃と夜は月よりや浦をあらはれ名よき人
侍来侍やちよひさる塩ぬ光みらそ侍姑のよ月

建長三年九月十三夜 仙洞新徳十首歌合

いほくやとあひやん松鶴やきし海らうは姑のよ月

寄月也 文永元年九月十三夜 後三十首

たふらうむひしはききし七千にちうく姑乃山はれ月

寄月夢

あひもあうれいあしを愛とえて月乃らうよぬらし 他

国九月十三夜 日七の侍又十首 ち素

名をえしは姑乃あしいしむらよき又月乃らうよぬら

ありの侍 寛元二

等しもそ別てあし月のあるうら月侍のあし

欲入月 文永二

月吟 月秋 日八年に月十日後白首翁自和屋朝歌の

侍らひて席をさあしは姑乃月侍のあしむらよき

惜月 日年に月十日後百首

姑乃あしむらよきあし天のさやあし侍姑のあし

馬 建長又月八月

志をたれ姑乃のあし侍屋のあし

日五九

今こそ心も乃指とあるもの物此等と属を唱れる
此よりものもつらさやすは秋名乃藤上野の鳥共洞た

日七年七月廿二日庚申漢百首三人詠之

初鳥乃洞と今やつらさなれ葉繁のころはあまの鳥を

雲属未来 貞永元年 日表尚産

秋とてと文とそみし初鳥のころはあまの鳥を

初鳥 建長五八

初鳥乃洞と文やあまの鳥雲井のころはあまの鳥

弘長元年 院百首

きつらまの源の鳥の秋名乃藤上野の鳥共洞た

雲間初鳥 文永八年 日廿二日 漢百首

初鳥乃洞と文とそみし初鳥のころはあまの鳥

院百首 日七年八月廿二日 前九古鳥家十首 日廿二日

きつらまの源の鳥の秋名乃藤上野の鳥共洞た

建長五年 九月

七月廿二日 文永八年 九月 院百首

院百首 弘長元年

初鳥乃洞と文とそみし初鳥のころはあまの鳥

文永八年 日廿二日 院百首

初鳥乃洞と文とそみし初鳥のころはあまの鳥

山朝霧 日七年九月廿日 前九左良家 月次十首

朝日教さすりいんく山の端わいへもあさきるわら

河旁 建長又年八月

妹旁乃うとておひれ名名川原をからぬせし乃埋

関旁 宝治元

鳥の音はうくあしひれ厨の音ありけりもせぬ秋物旁

山中秋鳥 建長二年 仙洞清歌合

波とりのも志く海まにの山みらとせぬと秋風を吹

田家秋意 文永七年九月廿日 前九左良家 月次十首

初をねのたくて乃産れいあむいり秋意に秋風をすし

里仗 安貞元

屋をきくまのあつ里秋風は波を衣うぬよの秋

揚衣 文永元年 於杉河守 二十三首

むすしふきつらさやれよ秋意をききしひらうらう衣れ

秋揚衣

さしあけまもはらに秋の風はせしうつふ衣うら也

岡揚衣 文永八年 月廿二日 揚衣百首

秋風はあまに志むしやいんせしけい秋意を衣うら也

揚衣掃 日二年 禅林寺 後七百首

秋風をすしあま志まぬ里人やさきときしうら衣うらん

海道掛衣

日七年九月五日おん上皇家月次十首

彼乃とともめをともしむるもあはれ衣をのうしむ打かぬを

侍掛衣 正嘉二

杖風よこみくのまはれむ里乃志りの衣うらら

掛衣函 承久二

衣うららぬを喜ばしむるはまぬ里乃杖を

月下夜 文永七年四月十日合持百首歌自和漢朗詠

とあはれむるはむにまはれぬる月乃とこや衣うらら

菊 建長又年九月

長月乃あまそとらぬ菊のむさくらた杖を久しかりん

わらえり杖のさうりらさく花程そ月のさくともそんた

あつさむととゆふ杖のさくうららふ杖のさく

序章 文永七年九月菊日前老古家月次十首

うはらむる菊にもあはれ花程長月をあはれむて

菊花結久 宝治元年九月菊 仙内同三首

やけえの柄こそあはれ菊程下代もあはれむすそん

菊起 文永七年閏九月菊日老古家月次十首

長月乃杖をさぬおのさよ菊のやぬをけあはれ

お菊 寛永元年十一月廿五日入内由屏風奇

立田山もあはれ菊程あはれむとあはれぬ杖の菊もあはれ

寛永元
物考乃あしはよむ然るもの時毎さあてらばよきり
ちやる非あひ山むし時毎もあしをぬきとばぬ日比

唐仁元年 島福寺権別当住持 田徑 勅を十首

新田山住乃木のむし時毎らうの子入らへん時毎ら

あきあけ立ぬるこくにやうお祭乃新文をゆきき

又まはるむひ乃あし時毎や接の目教をゆきき

あひあしをさう時毎らうの住持とらちを

あしあしをさう時毎らうの住持とらちを

文永元年 於粉河寺 三十三首

せきわゆるあしはあし新田船のみちにとむるまのり春

同二年 九月十九日 月次 三首

いそせら何毎にそくそく山洞とらめり住乃みちを

同七年 七月廿二日 庚申 後百首 三人歌

とく山あも何毎もあしあしとらちをさう時毎ら

初め物真意元子の表當座

さのあしやちし緑け船の文よふとらち時乃お祭

山田集 文永二年 九月 仙田津 初會

かど程集乃文と夕比あし小倉の山て思毎らうける

お祭の初會 承久元年

きこくの時毎らうまきよりあしみちの住持すくあし

西中 弘安 文永七年九月廿九日 前尾大目家 月次十之

わひ人の神一如い 弘安一乃ひとりや ぬらぬして ぬらぬ

雨後 弘安 日二年 深林寺 殿七百首

村のふらぬる 弘安 弘安 弘安 弘安 弘安 弘安 弘安 弘安 弘安 弘安

松岡 弘安 日又年三月十三日 終六十首

とらふ 弘安 弘安 弘安 弘安 弘安 弘安 弘安 弘安 弘安 弘安

朝 弘安 建長三

新田 弘安 弘安 弘安 弘安 弘安 弘安 弘安 弘安 弘安 弘安

河邊 弘安 文永七 弘安 弘安 弘安 弘安 弘安 弘安 弘安 弘安

大井 弘安 弘安 弘安 弘安 弘安 弘安 弘安 弘安 弘安 弘安

池邊 弘安 日元

本この文れもみちる 弘安 弘安 弘安 弘安 弘安 弘安 弘安 弘安

臨風 弘安 弘安 弘安 弘安 弘安 弘安 弘安 弘安 弘安 弘安

と記るる 弘安 弘安 弘安 弘安 弘安 弘安 弘安 弘安 弘安 弘安

雜 弘安 建長 又年 九月

初 弘安 弘安 弘安 弘安 弘安 弘安 弘安 弘安 弘安 弘安

長月

初 弘安 弘安 弘安 弘安 弘安 弘安 弘安 弘安 弘安 弘安

初 弘安 弘安 弘安 弘安 弘安 弘安 弘安 弘安 弘安 弘安

初 弘安 弘安 弘安 弘安 弘安 弘安 弘安 弘安 弘安 弘安

此のよむわ...のいふ海とよむいふ海のわらわら歌ん

秋 貞意二

くさき家の中...のぬるぬるの海の中風
さき...の国秋家...物もた山裡は秋風を吹
言ゆ...の海は秋風...
定転九

旅衣世系乃...
欠転九四哀十首
秋風...
足敷...
新和歌

了...
宛先二
あ...
かく...
宝永二年 前を故を長家十首

今...
社...
建長三年 吹田津 幸十首

海...
秋...
し...
正嘉二年 春日社 十二首

春日社...
むと...
むと...

夕日夕に照るよきそ懐を物と氣かゝる志は風とる枯木

私之書字本之款多死後集る記之

あつたはねて乃物をそきけにせる月之輝は葉を
風とる種田はるやの折のひきそよくにむそそ秋そ
又つらとせりしとせしそは定むのけ秋乃日くれ
此にこそ誰かむん村をに梅月をそよる乃月
冬^日又とるそ知ぬもの夜乃秋のつれな
あつたはねて乃物をそきけにせる月之輝は葉を

為家集上

冬部

初冬 初冬時雨 初冬月 時雨

時冬知時 朝時雨 暮時雨 旅時雨

旅宿時雨 落葉 庭落葉 隨處落葉

河落葉 浦邊落葉 橋下落葉 霜

庭霜 野外霜 樵踏霜 殘菊

見残菊 寒草 野寒草 深草邊

河千鳥 海邊千鳥 あり鳥 沈あり鳥

河冬 氷 氷初結 流水凍咽

綱代

尋綱代

冬月

冬月

冬山月

山冬月

水鄉冬月

冬曉月

冬朝橋

冬日

冬曉

冬雲

冬景

冬木

冬鳥

冬獸

冬橋

冬水

冬嶺

冬谷

冬池

冬田

冬館

冬月

弓場

豐明節會

野經夕會

鷹狩

長途鷹狩

雪似面

月照雪

山雪

高山雪

飛雪

原雪

雪中松

島松雪

湖雪

古心雪

門雪

塙雪

井雪

雪中金

園所雪

炭電

梅火

祓樂

佛衣

冬梅

梅先喜用

雪中會

志之次

歲會

園歲會

惜歲暮

田十二月

冬

冬歌

為家集上

冬

初冬 治長元年 院百首

いけととも^{新好}の^{中集}山里の^{お集}冬^{お集}の^{お集}志^{お集}を^{お集}む

お永七年七月廿二日 庚申 終百首三人詠

かみか月冬冬とて^{お集}為家本とて^{お集}吹志^{お集}厚^{お集}らん

初冬 何首 治長元

い^{文永三}は^{文永三}り^{文永三}我^{文永三}方^{文永三}の^{文永三}志^{文永三}を^{文永三}ぬ^{文永三}じ^{文永三}か^{文永三}み^{文永三}か^{文永三}月^{文永三}何^{文永三}首^{文永三}の^{文永三}冬^{文永三}と^{文永三}け^{文永三}を^{文永三}す^{文永三}らん

同又年三月十三日 終又十首

いじく今物又とそきつあはれぬる昔は袂ぬれた

同六年正月十八日 續又十首

と物そい何ぬいぬとそとすぬれあはれぬる昔は袂ぬれた

あみの月 寛永二六歌

うこの月志のぬれぬる本家あはれとそ散れと袂ぬれぬる

文永六年正月十八日 續又十首 六歌

そはせぬぬれぬとそこの月何ぬいぬとそやぬれぬる

時あ 貞應元

お祭るとそぬれぬるそあはれぬるそあはれぬる

時あ貞應元とそあはれぬるそあはれぬるそあはれぬる

正嘉二年十月 在大正家三首

うたせ志の袂乃おたせぬ月何ぬいぬとそ志のぬれぬる

弘長元年 院百首

今よに家志ぬれとあはれぬるそあはれぬる

文永元年 粉河寺三十三首

情まれ秋乃日敷いと何ぬいぬとあはれぬる

同二年十月十日 月夜三首

時あぬれせ袂乃袖のどに今也志のぬれぬる

同六年四月 日清百首 六歌

いぬぬれぬ時あと愛せぬる月あはれぬる

何多知時 安貞元年 系極亭丁月次志

冬多ぬしひ一守りせかみお月人あまふぬ初時多ふ

朝時多 文永二年 浮林寺教七百首

い花とぬかぬ若村家日あはそ時多そあふふらる

筆時多

筆海ありしれ山う紀をたあまそよこぬびし時多れ

旅何多 建長八年十月 徳倉日吉別當言蒙法常記と

かみの月於談道し後衣志くれそとてぬし思日り紀

旅者時多 文永二年 浮林寺教七百首

りし衣をぬきさぬる後ぬよと神ぬせとや又時多るらん

落葉の建長又十一

葉乃しし人のれ山里にめとく人ん世あふ木乃野あふ

康元二年 徳野山中首

こはあのみまやそらんああろの山あはれ木のたふえ

正嘉二年十月 右大臣家三首

此うりそぬあふやあひの魚にしめわにあしはる木枯る風

そあふあよそのてらちる木枯るあはれ楢のあをそあひは

今より乃そあまちえる冬枯のあよりもああふそあ

文永元年 粉河も三十三首

むとれつたたえしは木枯あちる風乃れあふあふあ

樵路歌

言く山谷の鳥より追風中我成るよてく山山人

残菊 日八年四月廿百後百首

た乃そそ冬そつれ神おれ白ひおれしく乃色成

見残菊 日二年 福柿と殿七百首

杖杖をよそ冬そのふるきつれ花くよあつていん

寒草 建長六年十一月

雪とるう枝のむねおれてく雪のこころをた乃思やれ

ありにけるはあつひこそ思くれ枯ておする露れあま

東流やうのあつと葉枕おれそひてれやとてくぬる

あつとそそあつとさうあつとせにれとる雪乃あま

天田の境ハといつれ地う山流中葉枕おれそいおれあつと

深藪子鳥 嘉禄元年

よひ乃まそそあつとらゆくあつと海のぬれおれそいおれ

あつと馬 安貞元年 仁徳と文十又首

音殺てるるにこやあつと川志れあも志くはあつとあ

あつと子鳥 文永又二年三月十三日後又十首

あつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあ

あつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあ

水鳥 日七年七月廿二日庚申後百首三人海く

いづくも月とさむいあきけさく入るも氷おほきり

池あきの歌又二

きあそり下は思ひあれさあおもいなるたけは

川を安貞元

あき紀歌乃をのむにせらまつくあきうまうる山河あ

氷 寛永元年十月廿御入内伊屏風歌

さし波やうらぬ時歌うま山見くもはうらくと

文永元年 粉河の歌三首

わとわらも山乃波はせ歌歌さむいゆまきうあきり

水初詣 日二季 祿林寺殿七百首

あきのうまやあきさあんあ川乃山下あそとあ

水凍咽 日八年 官十月廿百首 歌自和漢初

いとせのてあき甲あぬをいひうら水にむせあ山乃波はせ

細代 寛永元年十月廿御入内伊屏風歌

川原の波やうらあきの細代わにうまあきをきてせうらん

文永八年 四月廿百首

うらりせ歌うらあきとあきとあきとあきとあきの細代

尋細代 日二年 祿林寺殿七百首

船もれいあきあきあきあきあきあきあきあきあき

冬月 宝永元

ゆつていかにあつとさうらふたねにぬもぬ月の氣はひき
建七十一

弘長元年 院百首

あひぎるひこそあせれ世くあつとよたつらうをたの月
あらむたきあつと山見をあつりにさゆ白冬たの月

同二年十月廿六日月次三首

久きたつらの里れ川風よそくこるあつた月

冬 深月 天福元年 権大納言通方石屋の社々首

あつた月 玉のりあつた月よふたあつた月

冬 山月 安貞元年 宮内卿 勅を二首

あつた月 地りぬ山たつた月と梅よと梅よと

冬 山月 建長八年

あつた月 梅よと梅よと梅よと梅よと

冬 水心 冬月 文永二年七月七日 祿林寺 勅を七百首

あつた月 梅よと梅よと梅よと梅よと

冬 院月 建長六十二

あつた月 梅よと梅よと梅よと梅よと

冬 朝陽 寛永元年 権大納言 家康申 勅を二首

あつた月 梅よと梅よと梅よと梅よと

冬 日 文永二年 院 五十首

中やた神をそめられ吉野山にぬり名を成れり哉と云ふ
冬各

冬各の冬木に朽たさるる谷村と云ふ事
冬池

冬池の冬木に朽たさるる谷村と云ふ事
冬池

冬池の冬木に朽たさるる谷村と云ふ事
冬池

冬池の冬木に朽たさるる谷村と云ふ事
冬池

冬池の冬木に朽たさるる谷村と云ふ事
冬池

冬池の冬木に朽たさるる谷村と云ふ事
冬池

冬池の冬木に朽たさるる谷村と云ふ事
冬池

冬池の冬木に朽たさるる谷村と云ふ事
冬池

冬池の冬木に朽たさるる谷村と云ふ事
冬池

冬池の冬木に朽たさるる谷村と云ふ事
冬池

冬池の冬木に朽たさるる谷村と云ふ事
冬池

冬池の冬木に朽たさるる谷村と云ふ事
冬池

冬池の冬木に朽たさるる谷村と云ふ事
冬池

冬池の冬木に朽たさるる谷村と云ふ事
冬池

冬池の冬木に朽たさるる谷村と云ふ事
冬池

よ我らのとせたる雪とさひらくはくせたる雪のぬき
あうりつら雪のうねと秋のふれゆきともあ

雪似雨 建長又の十二月

深山より雪降し物解ありしとよむに志くや

月照雪 建長二年入る九月

あまうつむ山乃雪をひりまをふひしあまの松月

山雪 日又年二月 山中に松をけり雪をけりとも

十一もさしゆとめてまにひくえあつらひの雪

名山有雪 又永公は月十日後百首詠む松月

と死の松の雪にうねる松もとせたる雪のうね

雪 寛元三年入る松政家長谷百十二首

如も松の雪をけりあまの雪とあまの雪

名雪 又永二年四月又日後又十首

明もる松の雪は松の雪よりこぼりて流る雪

雪中松 弘長元

新雪と松の雪は雪をけり松の雪の雪

雪松雪 寛元元年 文田百十首

浪をぬ松の雪は雪の雪の雪の雪の雪

湖雪 弘久

あまの雪の雪は雪の雪の雪の雪の雪

古心雪 嘉祿元年 松本初之家二十首

あまにき雪あつらふ雪のたれこの

門雪 文永八年四月六日 後八十首

あつたは雪をたふらふ雪のたれこの

塩雪

あつたは雪をたふらふ雪のたれこの

井雪

あつたは雪をたふらふ雪のたれこの

雪本 金日二年 福林ら為七百首

あつたは雪をたふらふ雪のたれこの

園海雪 貞應

あつたは雪をたふらふ雪のたれこの

あつたは雪をたふらふ雪のたれこの

炭竈 文永七年七月廿二日 庚申 後百首 三人詠

あつたは雪をたふらふ雪のたれこの

爐火

あつたは雪をたふらふ雪のたれこの

柿葉 日二年 三月廿八日 後八十首 六歌

あつたは雪をたふらふ雪のたれこの

俳名

その世に二世に亘りて世に世に仙乃水衣を今もかこ

冬梅 宝治二年入唐右衛門督節

梅花本毎に雪ハ梅とて白ハ梅とて白ハ梅とて白ハ梅と

梅先春開 建長二年入唐右衛門督

梅先春開 建長二年入唐右衛門督

歳中堂 嘉祿二年 権大納言家會

梅乃ちけ雪成木毎に梅とて白ハ梅とて白ハ梅と

ありけ 文永六年四月十八日 候又十首 六歌

梅乃ちけ雪成木毎に梅とて白ハ梅とて白ハ梅と

歳書 弘長元年 院百首

六十ありてとて梅とて白ハ梅とて白ハ梅と
梅乃ちけ雪成木毎に梅とて白ハ梅とて白ハ梅と
ありけ 文永六年四月十八日 候又十首 六歌
梅乃ちけ雪成木毎に梅とて白ハ梅とて白ハ梅と

文永元年 粉河寺百首

梅乃ちけ雪成木毎に梅とて白ハ梅とて白ハ梅と

同七年七月廿二日 庚申 権百首三人海

梅乃ちけ雪成木毎に梅とて白ハ梅とて白ハ梅と

同歳書 寛元三年入唐権政家長谷寺十首

阿波坂の今とあぬ園ちれりどくものあはれ

情果言 飛久二

りよのあまにそと書あまうりつとあけむいぬん

冬 嘉禄元年 元寛治年 節句七十首

の夜乃山下あのをさし 出州園とそらあまうり

同年 任音社 二十首

あしつ浦の波をよよあまのさしあまのあま

あまのあまのあまのあまのあまのあまのあま

唐仁元年 入徳を改を居家 二首

あまのあまのあまのあまのあまのあまのあま

元元二年 入徳を改を居家 長谷寺

あまのあまのあまのあまのあまのあまのあま

あまのあまのあまのあまのあまのあまのあま

あまのあまのあまのあまのあまのあまのあま

宝治二年 前を改を居家 十首

あまのあまのあまのあまのあまのあまのあま

正嘉元年 卒名 百首

あまのあまのあまのあまのあまのあまのあま

あまのあまのあまのあまのあまのあまのあま

あまのあまのあまのあまのあまのあまのあま

培風乃あしり候乃さよめきり女に記すにせらん

弘長元年地急百首

さよめきり時乃際とあるもいさあけり一乃洞とせり
何と又雪乃あしりしとさき候世にきとあしり乃備とらん
ひきかすのりいぬゆ(か)きすのりぬいぬ候そいぬれをらん

冬初 唐仁元入乃古改土原家三首

枝もその楳にすしにりし海流田乃山いあをそとてゆ
風さそふ山乃さるもきこした時あてとるこりこれ月か

寛元三年入乃掃政家 長谷寺十一首

村町あさあきしり海流れを亭とるけのあき月か

松云書字中ニ記すに記記

建治十
つみの月時あきそふ山これら下地あすてこそ梅ひりけり

Handwritten text in a cursive script, likely a letter or a page from a manuscript. The text is written in dark ink on aged, yellowish paper. The script is dense and fills most of the page. There are some faint, illegible markings at the top of the page, possibly bleed-through from the reverse side. The text appears to be a personal communication, possibly a letter or a page from a manuscript.

